

「自分の中に毒を持つ」 岡本太郎 青春出版社

この本は毒である。毒は時として劇薬として大きな効果を生み出す。この本が君にどう作用するかは君次第だ。

この本は、一言で言うと岡本太郎の人生論だ。とは言っても読むことで「なるほど、素晴らしい、その通りだ。僕（私）もこれからそうしよう」などとなるわけではなく、むしろ強い反発を覚えるだろう。「この野郎、何言ってやがる。俺（アタシ）ならこうだ」となるのが普通である。岡本太郎もそのような狙いでこの本を書いている（と思える）。実際、本の中にこのような話がある。岡本太郎の個展で（注1）、1枚の絵を2時間も鑑賞して「嫌な感じ!」と言って立ち去った女性がいた。それを聞いた岡本太郎はすっかり嬉しくなった。岡本太郎が絵に込めた思想と正面から対決してくれたからだと言う。この場合の表現手段は絵であったが、文章でも岡本太郎は我々に挑戦してくる。高専生は1年生でも15歳。自分の人生観はだんだんできてきているだろう。岡本太郎の思想と対決し、自分を見つめ直してみてもどうか。

この本では読者を挑発する強烈な言葉がガンガン飛び交っている。最後にそのほんの一端を引用しよう。

”モノマネ”人間には 何も見えない。

いのちがけの「遊び」と甘えた「お遊び」とはまったく違うのである。

才能なんてないほうがいい。才能なんて勝手にしやがれだ。

やろうとしないからやれないんだ。それだけのことだ。

君はこの「毒」と対峙できるか。

2017年8月17日 大阪エキスポシティにて



太陽の塔の背中（写真：寺木）

1) 著者の岡本太郎は芸術家である。有名なので知っている人は知っているだろうが、知らない人はあえてどのような人物か前調べをせず読んでみてほしい。色眼鏡なしに文章と対峙することがこの本を効果的に読む作法だと思えるからだ。